

ユ 日本に来たとき、父、母、私、姉、妹と、母の妹、つまり、私のおばさんが一緒に、父と母が仕事してる間、私たち子供の面倒を見てくれたのがおばさんだったんです。だから本読みや勉強もおばさんが、教えられないけど応援する、ちゃんと宿題やりなよ、みたいな感じでした。

母と父は仕事に行っていて忙しいし、進路のことも相談してもわからないから「自分で考えなさい」で終わり。姉もいたので、結局自分で考えました。三者面談も、同じで、親に通訳していた。

エ わかる。書類が来て、「これは何て書いてあるの」って親に言われたから、「これはこういうことだよ」って答えたら、親に「もっと書いてあるじゃん」って言われて、「いやこういうことだから」で終わらせる。それで親は不満が爆発しちゃう。だからよくけんかになっちゃう。

ユ 両親とも仕事で忙しかったので、私のことはあんまり気にしてないのかなって思っていたんですけど、今、妹が中学校3年生で、母が相談してくるんですよ。「あの子は勉強大丈夫かな？」とか。それを聞いてみると、実は気にしてくれていたのかな、と思います。

学生時代に欲しかった支援

中・高生時代に学校や周りですこうしてほしかった、という支援はありますか？

HICEとの関わり、今までの活動

みなさんは浜松でいろいろ活動していると思うんですが、HICEとの関わりを含めてどんな活動をしてきましたか？

エ 大学の研究室では、ブラジル人アンケート調査をしました。何人世帯か、子供は学校へ通っているのかなどの基本的な情報を収集するプロジェクトを2回ほどやりました。大学外での活動では、「COLORS」(※)も。いろいろな学校に行き交わって、成果発表もしました。

僕は通訳としてよく使われるんですけど、実は通訳はすごい苦手なんです。でもいろいろな言葉を話す人と触れ合うことは通訳としてではなくて自分しかできないことだと思ってやっています。日本語を母語としない人たちから、いろいろな情報や、社会を良くしていく素材を集めることができるので、いろいろな言語を知っていて良かったと思います。良い経験だと思っています。

COLORSで活動していて、自分にもできることがあるんだと知って、それを強みに変えられたことが良いことかなと思います。

ユ 今やっている学習支援をしてくれる教室のことを知らなくて、ずっと1人で勉強していました。先生も私のことを日本人として見ていたと思うんですよ。名前も顔も日本人だし、でも本当は行きたかったなって思いました。

長 僕は中学校3年生のときに「はまっこ」という日本語教室があって、大体同じ時期に日本に来た子たちと一緒に勉強していたんです。中学校のときはそういうところを紹介してもらって入っていたんですけど、高校はもう何もなくて、自分で勉強していました。高校でも勉強を教えてくれるところを紹介してもらえると助かるかな。外国人がそんなにいない高校だったからかもしれませんけど。

ス 自分のときもほしかったですね。あと、スポーツの支援。フィリピンではあんまりスポーツをやらないね……。長 ないよね。ス 日本に来て、みんなが足速いし、泳げるし、びっくりした。長 そうそう。

職場では語学を使った仕事をしているのですか？

エ やっぱ通訳として求められることも多いですね。メキシコ出張ではスペイン語の通訳とか。本業はそっちじゃないけど。インド人が来ると英語で対応するとか、他にも、契約書の翻訳とか、見積書の翻訳もたまにやっています。

ユカリさんはどうですか？

ユ HICEとの一番最初の関わりは、多分、友達とフェアトレードのイベントに来たとき。HICEの職員の方から「あなた、ユキミちゃんの妹さんだよね」って言われて。それで、お姉ちゃんここでいろいろやってるんだ、って知ったんです。それで大学受験が終わってからCOLORSに入りました。その他は気になるイベントに来てますね。COLORSに入るまでは、今までブラジルにルーツを持つことでどこか自分不幸だったのかなと思っていました。小学校の頃は特に。みんなと同じ日本人だったら楽だったのに、



ユカリさん

ス 体育がとにかく苦痛。長 運動しないもんね、フィリピン。ス 本当に運動しないですよ。だからスポーツの教室があると嬉しいと思います。あと市立高校にインターナショナルクラスがあるのを知らなかった。それももっと紹介してほしい。

長 宣伝してほしい！エ 確かにそれは思う。ユ インターナショナルクラスは良かったです。1年生だけなんですけどポルトガル語の授業を受けられたので。5人のクラスでしたが、同じ境遇の子ががんばっていると思うと心強い。今外国人の子の支援をしています。中学生の子で日本生まれ日本育ちの子がインターナショナルクラスのことを知らなかった。先生が紹介してくれなかったそうです。知名度が低いんですよね。どこでも、「え、それ何？」って聞かれるので。

エベルトンさんは中・高生時代に困ったことはありませんでしたか？エ ブラジル人学校の中等部を卒業して

と。でもCOLORSで活動していて、自分にもできることがあるんだと知って、それを強みに変えられたことが良いことかなと思います。

長井さんはどうですか？

長 自分は専門学校の1年生だったときに、HICEを訪ねたのが最初ですね。それから実際にHICEと関わりを持つようになって、他の外国人の方々の現状を知りました。日本語ボランティア養成講座では、日本語の支援だけじゃなくて、外国人の置かれている背景も学んだりして「やっぱり浜松はけっこう先進的だな」って思うようになりました。今実際にボランティアとして関わっているフィリピンナガイサにも入れたし、いろんなきっかけをつくってくれて、つながりをたくさん持てた、という印象があります。

自分は今、市役所で働いているんですけど、外国人の置かれた状況を意識しながら今後の活動に活かしていきたいなと思っています。

ス でも体育とかスポーツは大事だと思うんですよ。フィリピンだと部活みたいなものがないから、治安が悪くなる。少年犯罪が多いのも、放課後にやることがないからっていうこともあるし。だから「私にはサッカーがある」みたいな得意なものをひとつ持つと、何かあったときに強いじゃないですか。外国にルーツを持つ人たちにとっては大事だと思うんです。

ス テラさんは？

ス そうですね。これまでの23年間を振り返ってみて、大学に入ったのが一番大きい。大学に入って津村先生というすごい先生に出会った。私はもともと建築士になりたくて、それに向けて勉強していたんですけど、絵だけじゃダメってわかって、3年ぐらい勉強してももう叶わないから「もういいや」と思って地元で大学へ入ったんです。

私は英語で授業を受けられる浜松インターナショナルユニバーシティをつくりたかったんですね。それを、入学してみんなに公言してました。「浜松国際大学つくろ」と。そして津村先生が声をかけてきてくれて「ステラが言っていた浜松国際大学つくろうよ」って。でもユニバーシティだといきなりだから一からやろう、ということとで小学校からやっただけですね。それが浜松インターナショナルスクールの始まりです。それからHICEともいろいろと関わりができました。

浜松市に望むもの

ス いろんな浜松市に住んでいるという共通点があるのですが、浜松は皆さんにとってもどういうまちですか？

ス 良く悪くも「伝統を守り抜く」みたいな、固い感じがありますね。でも本当はよそのものに寛大なまち。私たちがけいなく、これから人口も減っていく外国人がいっぱい入ってくると思



長井さん

外国人の置かれた状況を意識しながら今後の活動に活かしていきたいなと思っっています。